

## 《 覚 書 》

インターネット論壇における「非実証的歴史学」「反実証的歴史学」の行方  
—與那覇潤氏の「呉座鍵アカ事件」関連論説をめぐって—

向野 正弘

## はじめに

2021年3月中旬、呉座勇一氏のTwitterの鍵アカウントで様々な差別・誹謗中傷を行っていたことが明るみに出た（拙論では「呉座鍵アカ事件」と略称する）。このことは大きな問題となり、議論百出した。ただ私はどうもピンとこなかった<sup>1</sup>。

月日は流れて2023年6月下旬から7月上旬。インターネットを通して事件に論及する記事を眺めることができた。率直に言ってがっかりした<sup>2</sup>。特に二次加害が重要なテーマとして浮上していたといたということを理解できていなかったのは不明というべきで反省すべき点が多いとも感じた。

眺めていて、與那覇潤氏が呉座氏をホローする側で論陣を張っていることに気がついた。與那覇潤「呉座勇一氏のNHK大河ドラマ降板を憂う—「実証史学ブーム」滅亡の意味—」（web論座：2021.03.28）<sup>3</sup>に端を発す一連の記事である<sup>4</sup>。

與那覇氏の主張は、基本的な出来事の把握に問題があり、二次加害を煽る内容を含むものと危惧された。この與那覇氏の論説にまとまった批判を加えたのが嶋理人「與那覇潤氏の呉座勇一さんに関する記事への反駁」（1）（researchmap：2021.11.08）<sup>5</sup>で、都合3回に分けて検討を試みている。

私の見るところでも、與那覇氏の論述には、かなり問題がある。一方、嶋氏の批判は、與那覇氏の状況を適切に伝えてくれる内容に見える。ここでは、與那覇氏の論述を中心に取り上げて、インターネット論壇の一面に検討を加えてみたい。

## 1. 與那覇潤氏の到達した境地

そもそもなぜ、私は與那覇潤氏に着目するのか。私は「歴史教育における「非実証的歴史学」の成果の利用をめぐって—インターネット言説の成果を中心とする批判的考察—」（『教育社会史史料研究』14、2018.12.）<sup>6</sup>において、與那覇氏を「非実証的歴史学」の立場に立つ論者として批判的に取り上げ、結論的に、

評者の危惧するのは、アカデミズムの歴史学の側にいる「歴史学者」の「非実証的歴史学」の潮流である。マスコミのあり方とも関わるが、時代がスター性を有す「歴史学者」を待望しているのかもしれない。與那覇氏のような実証を重視しない「非実証的歴史学」を放任し、傍観してはならない。（p.44）

と注意を喚起した。その後與那覇氏は、積極的な言論・出版活動を展開する。一方私は、歴史教育から離れて地方史家として基礎研究に向かったので、與那覇氏の著述等を眺めることもなかった。

興味深く感じたのは、與那覇氏と呉座氏とでは、歴史研究のスタンスが違うということである<sup>7</sup>。與那覇氏は呉座氏の「界限」というわけでもない。與那覇氏の狙いは副題「「実証史学

ブーム」滅亡の意味」という点で、呉座氏を「実証史学ブーム」の象徴とみて、「実証史学」の陣営は実証的に守らない、実証史学には展望はない、という主張である。なお嶋氏の批判はこうした点にも及んでおり、可能な限り実証的に論証しようとしている。

嶋氏は與那覇潤「コロナ後の世界に向けて「役に立たない歴史」を封鎖しよう—コロナで滅びゆく歴史(2)—」(gendai.media:2020.05.20)<sup>8</sup>という記事を掲げて「典型的な「トンデモ」と化してはいないでしょうか」と指摘している。私は「そこまでなのか？」と興味を感じて見てみた。たとえば、

…(略)…逆にいうと、本人が意識しようがしまいが、過去に見られたのと同様に社会を動かしていく「流れ」自体は存在するし、そうした力動の作用を「歴史」と名付けて描き出す作業が、できる人も稀にはいる。…(略)…こう書くときと、私がその「稀な人」の一員であることを誇示していると思われるかもしれない。必ずしも誤読とは言えず、実際に私自身がそのことを長所だと捉えてきた時期もあった。…(略)…たとえるなら、世の中には「靈感が強い」人たちがいる。…(略)…しかし「歴史感が強い」のも、同様の特異体質だと考えてみたらどうだろう。…(略)…ただ問題は、いまという時代を「未曾有の危機との格闘」として体験する人と、「かつての失敗を繰り返している」ものとして感じてしまう人とは、どちらが生きやすいかという点である。…(略)…  
(ゴシック体、アンダーラインなど強調している箇所は向野による。以下同じ)

と主張する。「歴史感が強い」とは、「靈感が強い」と同様の特異体質…なのだろうか？私がかつて與那覇氏を「非実証的歴史学」という枠組みで捉えようとした。しかし現状の與那覇氏は、神秘的な「歴史感」にとらわれて「反実証的歴史学」の立場にあるように見える。嶋氏が「トンデモ」と表現したのは言い過ぎではないと思う。

こうした「特異体質」の與那覇氏から見ると、多くの歴史家の営為は極めて問題の多いものに見えるようで、

危機の前から何度も論じてきたが、自覚なく歴史を無効にする人たちは往々、物体としての史資料そのものを「過去」として愛玩するあまり、「現在」の出来事を見る際にも常に働くべき歴史の感覚を衰弱させてゆく。だとすればそうした物理的な「接触」に関しては、危機の後でもむしろ禁じたままにする方が、コロナ以降の世界に歴史の居場所を作る糧になるだろう。

と述べている。私なりに解釈してみよう。與那覇氏のような「歴史感」のある人物以外の自覚のない歴史家は、「物体としての」史資料そのものを「過去」として愛玩しすぎて、「現在」の出来事を見る際の「歴史の感覚」(要するに「歴史感」)を衰弱させていく。だから「物体としての」史資料との接触を禁じて、新しい歴史の居場所を造った方がよい、というようなことになると思う。

私も「自覚がない」し、「現在」の出来事を見る際の「歴史の感覚」が鋭敏か、と問われれば、お恥ずかしい次第である。ただ與那覇氏の言う「物体としての」史資料を愛玩しない「歴史の感覚」のある歴史が素晴らしいものなら、何も無理矢理に居場所を造らなくても自ずから取って変わるのではないだろうか。

以上、與那覇氏の到達した境地は、私がかつて危惧した「非実証的歴史学」の段階を離れて、反実証的は神秘主義的な段階にあるように思われるのである。

## 2. いわゆる「陰謀論」への傾倒

與那覇潤「歴史学者「呉座勇一氏のNHK大河ドラマ降板を憂う—「実証史学ブーム」滅亡の

意味—」(Webb論座：2021.03.28)<sup>9</sup>は、冒頭部分において、

…(略)…呉座勇一氏(日本中世史)が、SNSでの「炎上」がきっかけで、NHK大河ドラマの時代考証を外れることになった。発端は、フェミニストとしての批評活動でも知られる北村紗衣氏(英文学)との論争である。／当初は、日本中世史の大家である網野善彦(故人)の文章を「正しく読めるのはどちらか」という論点での、よくある学者どうしの諍いだった。しかし呉座氏が従来から、彼のTwitterアカウントのフォロワー(=おおむねファン)にしか見えない場所で、何度も北村氏を揶揄していた事実が明らかになり、「女性蔑視だ」との非難が殺到することになった。／呉座氏はその後、北村氏に対して非を認め、謝罪している。私自身、呉座氏の行為は褒められたことではなく、それが妥当な結末だと思う。

と述べている。鍵アカウントの内輪の話で、北村氏は知らない話だった。したがって論争などはない。網野善彦氏に関する話は、先立つ別の方の話である。與那覇氏は発端の理解から誤っている。

さすがに事実と違いすぎており、批判が澎湃と起こった<sup>10</sup>。基本となる事実関係がゆがんでいてはその後の議論もゆがむ。嶋氏は、諸々の考察を踏まえて與那覇氏の主張を、

話をまとめましょう。「與那覇1」「與那覇2」「與那覇3」は、呉座さんの起した問題を捻じ曲げて、本件のみならず多くのハラスメント被害者に二次加害を加えるものです。被害者である人たちを無視し、さらには加害者こそ被害者だと言い出し、結果論で行動した人びとに責任をなすりつける。これらは典型的な陰謀論のパターンだと、それこそ呉座勇一さんが快著『陰謀の日本中世史』で書いている(22ページ、31-32ページ)ことなのは皮肉です。

とまとめる。私見では、この事件には、「陰謀論」がよく似合う。ただしあくまでもフィクションとして構想すれば、ということである。なお與那覇氏は、はじめから事実を無視して独自のストーリーを描こうとしているようなので、「典型的な陰謀論」とまで言い得るかどうかは、やや疑念もある。どちらかと言えばいわゆる「歴史修正主義」のように見える<sup>11</sup>。ただ「実証的歴史学」を否定する先に待ち構えているものは、いわゆるいわゆる「陰謀論」と「歴史修正主義」ということになる。

### 3. 與那覇氏の描く一つの「陰謀論」

「呉座鍵アカ事件」において、鍵accountの内容を「さえぼう」氏に密告した人物は誰なのか。4000人以上のfollowerの中の一人の人物こそ、この事件をリアリズム文学の手法で描こうとする際に重要な役割を果たす人物となる。與那覇氏の「論座」記事に対するコメントの後半部に、このことに論及するコメントが出てくる。以下のようなものである<sup>12</sup>。

no nameID: 622339通報 まあ私は鍵アカ晒したり、女性にDMかなにかを送ったのは男だと思いますよ。呉座先生、私は応仁の乱も中世史も読んでいてファンなんですけど若きホープですし、いつか男の嫉妬でこんなことになるのでは？と心配はしていました。／鍵アカ晒した人は問題ないの？／裏アカやラインも信頼してた人にでも何されるかわからん。近寄らんほうがいいツールかも(<https://webronza.asahi.com/comment/comment.html?comment=2021032600009#ulCommentWidget>, p. 8、最終閲覧日2023.07.09)

こうして「スクリーンショットを提供した」一人だと名乗り出る人物が登場する。ハンドルネームを「足軽大将」という。「令和三年・呉座の乱、回顧録」(ハンJ速報：2021.05.24)<sup>13</sup>という記事である。冒頭、

某（それがし）……名乗るほどのものではござらんが、もしも後世、この「呉座の乱」が史書に記されたのであれば、こうなろう。／某がスクリーンショットを提供したことにより、北村氏側は呉座氏を揶揄するツイートをした。これにより、一連の騒動が勃発する……。／とはいえ、まあ、北村氏にスクリーンショットを提供した者は複数おるからの。わしなんぞは所詮雑兵、せいぜいが足軽大将よ。少なくとも、呉座氏側にわしは見えとらん。影も形もない。素人は黙ってると殴られて、奴のファンネルがクソリプしまくって、盛大に奴らがwwwだのつけて終わる。そういう雑兵扱いであろうな。／どのような気分がするものであろう？ そんな雑兵が放った一矢が契機となり、失墜する気分とは。これぞまさしく乱世よのう！ 歴史好きならば、血湧き肉躍ると思わぬか？／さて、わしは事件の経過を辿ろうとは思わん。その手の記事はいくらでもある。／わしはな、乱世のならいに従い、なぜ敗北したのか、そして今後何が起こるのか、予測してみたいだけよ。／わしが何者であるかは、些細な問題じゃ。というもだな、一時、名前を出して発信しようとも思ったのだが、匿名でウロウロして、相手が気付かぬうちに火矢を放ち、城館ごと燃やす妙味にめざめた。ゆえにわしはこのままでいく。／大義のために今後も火矢を放つ！ これぞ乱世よ。

と述べる。「足軽大将」氏の発言は魅力的である。まさしく「陰謀論」とはこういう乗りだろう。

與那覇氏はここに目をつける。「オープンレター・ディストピアを排す：呉座勇一氏の日文研「解職」訴訟から考える・完」(アゴラ、2021.12.29)<sup>14</sup> は、Twitter上での「さえぼう」氏と「小檜山青」氏のやりとりに着目する。そして三柳遼一「呉座勇一氏事件と『足軽大将』の「裏切り」～あるまとめサイトの投稿文の分析から考えるネット文化としての冷笑問題～」(note: 2021.09.08)<sup>15</sup> によりつつ、

三柳遼一氏（私は面識・交流はない）が9月8日に掲載した記事によると、北村氏のいう「複数の信頼できる筋」ないし「知らないところ」——Twitter上での交流から推量すると、前者の可能性が高く思われるが——の内には、かなり高い確度で小檜山氏が含まれているようだ。三柳氏は、5月4日に「足軽大将」なる筆名で行われた以下のような投稿の著者を、多様な傍証から小檜山氏と推定している。

と述べ、「小檜山青」＝「足軽大将」とし、

しかしこの小檜山氏がもし、意図的に呉座氏の失墜を謀って北村氏に各種の情報を提供した人物であったとすれば、おそらく見る人の印象は大きく変わるであろう。／連載第7回の追記でも指摘したが、自らは読む権限のなかった呉座氏の鍵アカウント内での発言内容を、どのようにして把握したのか、北村氏の説明は一貫していない。炎上の契機となった左のツイート（3月17日）と、本連載への反論として記された右のツイート（11月23日）を対照すれば、両者が矛盾することは誰の目にもわかる。

と述べ、断定を避けつつ慎重に、「さえぼう」氏と「小檜山青」氏との共謀という印象を作り上げていく。「さえぼう」氏が「小檜山青」氏について多く知っているとは思えない。つまり「さえぼう」氏には説得的に否定しきれない事柄なのである。

#### 4. 一つの「陰謀論」の破綻

「陰謀論」は、明確でないからこそ「陰謀論」なのである。それらしい真偽未詳の話でよいのである。與那覇氏は、

むろん三柳氏による小檜山氏への批判には推測が含まれ、絶対に確実とは言い切れない部分が残る。また本人ではなく「その人の友人」の言動を根拠に批判するのは、本来は誰に対してであれ、不当

！で礼を失した振る舞いだ。

と念を押す。三柳氏の論を都合よく利用しておいて、「本来は誰に対してであれ、不当で礼を失した振る舞いだ」というのである。この話がこれ以上、深掘りされないように念を押したと見えないこともない。

しかしこれで終わらなかった。これを見た三柳氏は困惑した。そして年の暮れから正月を徹して、「與那覇潤氏の記事への反論—主に「吳座氏事件」に関する北村氏と小檜山氏の共謀説(=陰謀論)に対して」(note: 2022. 01. 04)<sup>16</sup>を執筆する<sup>17</sup>。

三柳氏は、

この記事において與那覇氏は、私の記事を引用しつつ、北村紗衣氏と小檜山氏の関係について批判的な立場から論じているが、私は記事の内容について非常に悪質(注)な印象を受けた。／というのも、與那覇氏は明確には主張していないものの、北村氏と小檜山氏が共謀して吳座氏を追い落としたというミスリードを図っているような表現をしているからである。

と述べる。「非常に悪質な印象」と「ミスリード」を打ち消すにはどうするか、三柳氏は、

このように、與那覇氏は(向野補: 五つの)段階を踏みつつ、北村氏と小檜山氏が共謀して吳座氏を追い落としたかのような印象を作り上げている。具体的に事例を積み上げ、結論を明言しないことで中立性を装っているものの、実際には北村氏へ反発する層を満足させるために書かれた記事なのは明白である。／しかし、上に挙げたような事例には誤り、あるいは意図的な事実の無視が多い。当記事では、その問題点について具体的に指摘し、そのうえで、與那覇氏が唱えるような陰謀論は存在しないことを明らかにしたい。

と述べる。與那覇氏の印象操作を論理的に分析し、その上で「陰謀論は存在しないこと」を明らかにしようとする。「指摘1: スクショ入手方法についての説明は矛盾していない」「指摘2: 小檜山氏による北村氏の著作書評記事は吳座事件を見越してのイメージアップキャンペーンではない。」ここまででは、問題なく納得できる。問題は「指摘3: 北村氏と小檜山氏は共謀などしていない」である。

三柳氏は、「いかにも陰謀論的な着眼点であるが、ここで声を大にして言いたい。／小檜山氏は陰謀を巡らせられるほど賢い人間ではない」と述べる。一見むちゃくちゃな論なのであるが、三柳氏ほど小檜山氏について精通している方は(小檜山氏を除いては)いない。従って三柳氏の論に乗って立論している與那覇氏には反論することができないということになる。三柳氏は、

ともかく、小檜山氏が北村氏と陰謀を巡らせたと思う方は、小檜山氏のTwitterや記事をよく読んでほしい。陰謀を張り巡らせられるような慎重なタイプの人間じゃないことが、よく分かるはずである。そうすることで、與那覇氏が記事中で臭わせた北村氏が小檜山氏と共謀して吳座氏を追い落としたという陰謀論も、ただの妄言でしかないことがよく分かるはずである。

とダメ押しする。改めていうまでもなく、全面的に三柳氏の論に依拠した與那覇氏には、この指摘を覆すことは不可能である。

## おわりに

私は、別稿を記した際に、與那覇氏の実証主義の歴史学を嫌悪するに至った経緯を知りたい

と思った。今回、與那覇氏の「歴史感」という主張に接して、さらにより深く知りたいと思うようになった。

與那覇氏の「呉座鍵アカ事件」に関する最初の記事の副題は「「実証史学ブーム」滅亡の意味」であった。この副題に対して、違和感を表明するtweetが見られた。以下のようなものである<sup>18</sup>。

八谷 舞@my\_my\_me\_mine/2021.03.28/「呉座氏というシンボルを損なった「実証史学ブーム」なるもの」……実証史学はブームなんかではないし、まして呉座がそのシンボルなんかではない。與那覇潤、数年前から世迷い言が過ぎると思っていたが、さすがにこれひどいんじゃないの。

歴史教育を眺めている私の感覚でも、「構成主義」や「相対主義」のブームという感じで、「実証史学ブーム」があったとは思えない。歴史教育における「構成主義」や「相対主義」の動向と與那覇氏の「歴史感」という主張には、どこか底通するように感じるのである。その先に待ち受けるものは、いわゆる「陰謀論」「歴史修正主義」「神秘主義」としてよいであろう。

さて「呉座鍵アカ事件」に関する私見を述べよう。第一に、実証主義のスタンスで歴史学を探究している研究者も「非実証主義」「反実証主義」の歴史学へと落ちていく危険を常に孕んでいることが明らかになったと思う。私見では、実証主義というものは、歴史学を深めるための基本的な技術であり、ある程度は歴史を扱う上で承知しておくべきものである<sup>19</sup>。問題はそこから先だろうと思う<sup>20</sup>。

第二に、私は、歴史学を批判の学だと考えている。論文を書くということは、批判に身を晒すことだ。鍵accountというのは、批判のない、序列のある世界であり、歴史学にふさわしくないとと思う<sup>21</sup>。これからは、より一層相互批判が大事なのだと思う。

第三に、歴史学云々以前、社会人としてのレベルが低すぎる。不平不満の種は尽きない。自身の不満と社会の不満とが共鳴しない点が不思議でならない。歴史学者が現実の社会に目を向けないで、高見から睥睨するようなスタンスで、よりよい歴史研究ができるだろうか。私は懐疑的である。

現実世界を生きる私は、小さな陰謀を操る。歴史学の世界ぐらいいは、陰謀のない風通しのよい世界であってほしいと願うのはやや身勝手に過ぎるだろうか。

1 私自身のフェミニズムやジェンダーに対する感度が低いのではないかと指摘されれば、思い当たる節がある。ただあまりにも幼稚な話で、議論の余地はないと考えていたと思う。また呉座氏が北村氏に謝罪し、北村氏も受け入れた、ということで、この点も問題はないと考えていた。今回、改めて様々な見解を読んで感じたことは、呉座氏自身の存在の希薄さである。ここで取り上げる與那覇氏の論説に対して、北村氏は見解を表明している。対して呉座氏は終始傍観している。何事にも理由はあろう。しかし呉座氏はなすべきことをなさなかったのではないかと。取り巻く陰謀に身を任すような生き方は歴史家にふさわしいものとは思われない。

2 呉座氏一人のことでなく、「界限」と呼ばれる取り巻きの存在が指摘されている。また呉座氏をめぐって様々な人たちが蠢いている様子も少しわかった。構造的な問題が層をなしているようにみえる。この「界限」を中心とする動向は、歴史学の世界を、それとは異なる原理によって裏から動かそうとするものであって、好ましいものとは思われない。きちんと解明して、禍根を残さないようにするべきである。

3 <https://webronza.asahi.com/national/articles/2021032600009.html>、最終閲覧日2023.07.09。

4 與那覇氏はアゴラに場所を変えて連載していく。

5 [https://researchmap.jp/blogs/blog\\_entries/view/137817/8c1b9642f73e022e8cab9084b3d75e42?frame\\_id=478704](https://researchmap.jp/blogs/blog_entries/view/137817/8c1b9642f73e022e8cab9084b3d75e42?frame_id=478704)、最終閲覧日2023.07.09。

6 <https://researchmap.jp/kouno-masahiro/misc/14570905>。

7 向野正弘「百田尚樹著『日本国紀』騒動茫観記—インターネット上の言説から考える「反実証的歴史学」の動向—」(『教育社会史史料研究』15、2129.3、file:///C:/Users/user/Downloads/%E5%90%91%E9%87%8E%E6%AD%A3%E5%BC%98%E2%91%A12019.02.14%E8%8C%AB%E8%A6%B3%E8%A8%98.pdf)の註9において、與那覇氏の主張を百田尚樹氏の発想に類似していると指摘し、「非実証的歴史学」「反実証的歴史学」の潮

流という点では、與那覇氏と百田氏とを連続した流れとして捉える視点を必要とするのではないかと指摘している。一方、吳座氏に対しては、註30で、「歴史学者の中では、吳座勇一氏が『朝日新聞』紙上ならびにインターネット上で要点を突いた批評をしている。ただ、評者を含めて多くの歴史学者は総じて茫観しているように見える」と肯定的に評価している。また拙稿「歴史教育における「非実証的歴史学」の成果の利用をめぐる—インターネット言説の成果を中心とする批評的考察—」（『教育社会史史料研究』14、2018.12、file:///C:/Users/user/Downloads/%E2%91%A4%E3%80%8C%E9%9D%9E%E5%AE%9F%E8%A8%BC%E7%9A%84%E6%AD%B4%E5%8F%B2%E5%AD%A6%E3%80%8D%E3%81%AE%E5%88%A9%E7%94%A8%20(2).pdf)「Ⅲ. 「史論的歴史学」の末路—與那覇潤著『中国化する日本』に対するインターネット上の幾つかの批評ならびに「歴史学者廃業記」を拝見して—」においても與那覇氏の主張を批判し、結論的に「與那覇氏のような実証を重視しない「非実証的歴史学」を放任し、傍観してはならない。歴史研究者は、きちんと自身の研究領域に関する謬説を批判し、歴史学の重要性を主張するべきであり、評者が危惧するまでもなく、そうした動きは起こっているようである」とまとめ、その箇所に註を付し、註37として、「歴史に学ぶくらいならワンピースを」日本史学者・吳座勇一の警告」を引用し、私見を補足している。

8 <https://gendai.media/articles/-/72694>、最終閲覧日2023.07.09。

9 <https://webronza.asahi.com/national/articles/2021032600009.html>、最終閲覧日2023.07.09。

10 <https://webronza.asahi.com/comment/comment.html?comment=2021032600009>、最終閲覧日2023.07.09。

11 「陰謀論」にしても「歴史修正主義」にしても、浩瀚な研究のあることで、より厳密に使用するべき用語かもしれない。ここではやや大雑把な使い方となっている。私見では、史実（事実）を無視して捏造するようなものはいわゆる「歴史修正主義」に近いように感じる。「陰謀論」というからには、なにがしかによって「陰謀」が繞らされているという説明がなされるべきだと考えている。

12 後に続く類似のものも掲げておこう。「no nameID: 5d8deb通報鍵アカ晒したり、人に送りつけるなんて怖〜。／誰？その送ったって人」(p.10) / 「no nameID: 410650通報吳座のツイート暴露した人間は、これだけの騒ぎになって、今頃、高笑いしているだろう。が、誰がやったのかは、いつかわかる。必ずわかる。／マクベス夫人の手と同じだ。拭っても拭っても、血のあとは消えない。」(p.10) / 「no nameID: 410650通報鍵をかけたツイート暴露する行為は密告と同じ。密告者は恥を知れ。」(p.10) / 「no nameID: 410650通報この件で責められるべきは、吳座氏が鍵をかけていたツイートを、いきなり北村氏に送った人間だろう。そうする前に、吳座氏に注意すべきだったのではないかと。吳座氏の発言が問題だと思ったのなら、まずは、鍵の内側で討論すべきだったのではないかと。…(略)…学者、研究者という自覚があるなら、「仲間うち」で起きた問題は、まず、仲間うちで解決するという自治の精神を持つべきだ。」(p.11)。

13 <https://nanyade.livedoor.blog/archives/28970175.html>、最終閲覧日2023.07.09。

14 <https://agora-web.jp/archives/2054465.html>、最終閲覧日2023.07.09。

15 <https://note.com/mitsuyanagi/n/n32c7638fb21a>、最終閲覧日2023.07.09には削除されている。

16 <https://note.com/mitsuyanagi/n/ne6ddcd49c71c>、最終閲覧日2023.07.09。

17 三柳氏は、先んじて「武者震之助」氏考—その思想のルーツと正体について—(note: 2021.08.29、<https://note.com/mitsuyanagi/n/na354f586e84b>)「同②—書評に見るライターとしてのスタンス—」(note: 2021.09.04、<https://note.com/mitsuyanagi/n/n5bb0880bbe25>)を公開していたが、最終閲覧日2023.07.09現在は削除されている。「武者震之助」(小椋山青)氏を「吉梨(きつり=このざまんぐ)」氏であると「推理」して論を展開し、説得的であった。

18 「tombo@Yama\_to\_Sima/2021.03.28/「吳座氏というシンボルを損なった「実証史学ブーム」なるものは今回の騒動を最後に雲散霧消し、歴史学それ自体の意義を顧みる人もやがて誰もいなくなる」：ブームは雲散霧消しても実証史学が雲散霧消することはない。そもそも実証史学は「ブーム」になるようなものではない。」「元老院議員@新アカウントに移行中@Batory1560/2021.03.28/「実証史学ブーム」なんてものがあつたのか???/中世史ブーム的なものなら確かにある(あつた?)けど。今回の件では確かにその界限にとつての打撃になってはいるけどもゴッドハンド並に学会全体の信用を損なった訳でもあるまいて。」なおこの点については、嶋氏もきちんと論じている。

19 「非実証主義」の潮流から作られ、「反実証主義」へと向かうかに見えた『日本国紀』のその後を伝える記事がある。名嘉真春紀(浮世博史書編集者)「読者が変えたベストセラー——『日本国紀』元版と文庫版を検証すると」(前編/後編) <https://book.asahi.com/jinbun/article/14502731> / <https://book.asahi.com/jinbun/article/14521046>、最終閲覧日2023.07.09。)は、『日本国紀』の旧版から文庫版への改訂を、浮世博史『もう一つ上の日本史 『日本国紀』読書ノート』(幻戯書房)の指摘を踏まえて検討する。せっかく参考文献をつけたのに浮世氏書も掲げず、指摘通りに改訂している箇所もあるとのこと。「こっそり改版」スタイルは相変わらずで、基準も明確とは言い難いようである。それでもまとめとして、『日本国紀』の記述の事実性については、歴史を愛する様々な分野の方が、思想の垣根を超えて「共闘」する、という稀有な光景を目撃していた」とし、「そこに私は、「分断」とは異なる可能性を感じました。その方針が無ければ、浮世さんの本がここまで支持をいただくことはできなかったでしょう」とまとめている。私見では、『日本国紀』は「非実証的歴史学」の書として作られ、「反実証主義的歴史学」へと道を開く危険を孕んでいた。しかし「実証的歴史学」の潮流を無視することはできなかつ

た、ということになるのではないだろうか。

20 やや意味ありげな書き方になったが、このことは迂遠な話になる。稿を改めて見解を述べたい。

21 Twitterには様々な危険が潜んでいると思う。現職の方は守秘すべき機密もあろう。職場に迷惑をかけてはいけない。私自身は、器用な人間ではなく、ハンドルネームを用いようとも、素性はすぐにはつきりしてしまうので、現職の時にはtweetしなかった。従って現職の方には、ハンドルネームを用いることも必要なことだと考えている。しかし別人格の自分を解放するようなことはよいことだとは思えない。あくまでも実名でも発信できる内容に留めるよう努力すべきであろう。

(2023.07.10)